

# 科学研究活動のモード論をめぐって



巻頭言



権田 俊一\*

最近の科学研究活動のモード(様式)論がよく話題にのぼる。今までの研究の主なやり方は、ある研究分野の中で考え、仕事をし、同じ専門分野の人に評価されて業績となるやり方で、これをアカデミズム科学あるいはモード1の研究と呼ぶ。これ以外のやり方(たとえば社会に開放された科学研究、問題設定が応用対象で決まり、個別な専門分野を越えた研究様式で研究を進め、参加者も大学の研究者のみでなく産業界、行政機関、市民など広い範囲になる)をモード2と呼ぶ。これらはギボンズらにより1994年に提唱されたものである。

モード2の議論のときに、脳裏に浮んだことは、私の仕事場である産業科学研究所にモード2の研究を行いやすい環境をつくったらどうかということであった。産研は、産業に必要な先端的な事項で材料、情報、生体に関する総合研究が設置目的になっているが、ほとんどすべてがモード1の研究であり、学部の研究との違いや総合研究の実状が必ずしも明らかでなく、研究所の特徴をどう出すかがいつも念頭にあったからである。つまり新しいタイプの研究様式を先取りすることで研究所の

特徴を出せないかと考えたのである。

ところで、モード2の研究の行きやすい環境とは何だろう。モード1の研究様式に慣れた研究者にモード2を理解して貰うこと、それからモード1の研究だけでよいと考える人も当然いるだろうからよく議論し、モード2が必要かどうかを考えることが必要であろう。モード2の研究をやってみようとか、そういう人を側面から応援しようとかいう人が出てくれば、まずは環境が少し整ったということになる。

次はどう研究テーマをとりあげるかであるが、これは問題の存在を広い範囲で知る必要がある。このためには公的機関、産業界、市民グループなどの交流の場という環境が必要と思われる。

研究に参加する人の問題では、モード2の研究は産研だけの研究陣容では対処できない問題が多いと予想される。そこで大阪大学という総合大学の持味を生かして、理工系学部だけでなく法、経など文系の学部、研究所等とも問題を一緒に考える環境づくりが必要になる。

これらは研究者の意識や交流の場に関するものであるが、問題設定や研究グループ形成のために研究費を用意するというのも勿論モード2研究環境整備の中に入ってくるであろう。

以上はまだ机上の、というより頭の中だけの空論かもしれない。今後セミナー、企業との懇談会、文系研究者との交流などを企画して環境づくりを模索してみたいと考えている。いろいろな考え方、議論が出てくることを期待したい。

\*Shun-ichi GONDA

1936年9月13日生

1962年早稲田大学大学院理工学研究科電気工学専攻修了

現在、大阪大学産業科学研究所(量子機能科学部門)、  
所長・教授、工学博士、電子材料工学

TEL 06-879-8380

FAX 06-879-8409

E-Mail gonda@sanken.osaka-u.ac.jp